

## 詩編 第68編 19節

「ほむべきかな。日々、私たちのために、重荷をになわれる主。私たちの救いであられる神。」

神を讃える声から始まる。讃美の声である。心からの言葉である。思わず生まれた言葉である。心から真っ直ぐに生まれた言葉である。正真正銘の心の言葉である。この讃えの言葉に直結しているのが、私たちの重荷である。それも、日々の重荷、絶えることの無い重荷に言及する。

重荷の存在と讃えの言葉が同居する。重荷を日々背負う者が発見する讃えである。重荷の渦中にある者が心の底から、心から率直に讃えるのである。普通あり得ないことである。普段見ることのできない光景であり、聞くことのない言葉である。その不思議が神を讃えている者に起こっている。

私たちには絶えない重荷がある。しかし、私たちはわかっている。私たちは知っている。私たちのために、私たちの日々の重荷を担われる主がおられることを。私たちの重荷を担われるばかりか、私たちを救い、その主の御名を讃える。この主を私たちは体験している。

私たちが負うことの出来ない日々の重い荷を、私たちの救いの主が担ってくださる。この不思議に満ちたあわれみの主なる神を讃美する。

2022年9月22日